６　興福寺旧境内出土将棋駒・習書木簡・題箋軸　31 点　　［有形文化財（考古資料）］

［所在地］　橿原市畝傍町　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

［所有者］　奈良県

［出土地］　奈良市登大路町

［時　代］　平安時代（11 世紀後半）

［概　要］　本件の将棋駒・習書木簡・題箋軸の出土地は、興福寺旧境内の一角にあたり、江戸時代には吉祥院（県文化会館周辺）と、観禅院（登大路バスターミナル周辺）が所在した地点にあたる。中世を通じて興福寺の境内地の一部であった。

吉祥院地区における平成４（1992）年度の発掘調査では、井戸状遺構から将棋駒（玉将３点、金将４点、銀将１点、桂馬１点、歩兵６点、不明１点）が出土した。これに加え、「天喜六年（1058）」と墨書された題箋軸（巻物の軸）や、表側に「酔像」「金将」「歩」「歩兵」「歩兵兵」と書かれた習書木簡も出土した。これらは共伴した土器の年代から 11 世紀後半頃に埋め戻されている土層から出土した。題箋軸に記された年号と土器の年代に矛盾がないことから、将棋駒も「天喜六年」に近い年代が与えられる。

観禅院地区における平成 25（2013）年度の発掘調査では、井戸と土坑から将棋駒（酔象１点、桂馬１点、歩兵７点、無銘３点）が出土した。いずれも井戸あるいは土坑の上層埋土中から出土している。共伴した土器の年代から、井戸出土品が 11 世紀後半～12 世紀前半、土坑出土品が 12 世紀中頃とみられ、若干の時期幅を持つ。

井戸の上層からは「承徳二年（1098）」銘の題箋軸が出土しており、土器の年代とも矛盾がないことから、「承徳二年」に近い年代が与えられる。

吉祥院地区出土将棋駒は、日本最古の出土事例である。また、観禅院地区出土将棋駒のうち「酔象」は、鎌倉時代に流行した大将棋や室町時代に流行した中将棋の駒として知られていたが、本出土例によって、平安時代から用いられていたことが明らかとなった。さらに、「酔象」以外の中将棋に使用された駒が見られないことから、初期の将棋に「酔象」を用いた 38 枚制小将棋が存在した可能性がある。

このように本例は、考古資料として、日本最古の出土例であるという重要性に加え、平安時代の将棋駒及び遊戯法の実像を検討する上で貴重であり、日本の将棋の歴史と日本遊戯史にとって重要な資料である。